

# Archeological Evidence for a Cultural History Study of Takakai

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/43394">http://hdl.handle.net/2297/43394</a>             |

# 鷹甘の文化史的考察 — 考古資料の分析を中心として —

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

基 峰 修

## 要旨

鷹甘は『日本書紀』に記載された用語で、鷹飼とも書かれる。『日本書紀』では、鷹の飼育と調教・管理を行った職能集団である鷹甘部が、仁徳天皇の時代に組織化されることが記載される。

従前の研究では、放鷹史の一角として、鷹狩りが渡来文化であることが認識されてきたに過ぎず、文化史的側面から鷹甘に関する資料の分析と追究は、ほとんど行われてこなかった。考古資料を中心とした分析では、鷹匠埴輪の性格論に固執してきたと言っても過言ではない。この点が、研究史上の問題点として指摘できる。

本論では、(1)鷹形埴輪、(2)鷹匠埴輪、(3)高句麗壁画古墳の鷹狩り図といった考古資料の分析による比較検討に基づき、朝鮮半島の鷹狩りとの関係を中心に、文化史的側面からの考察を試みた。

検討の結果、鷹匠埴輪の出土状況に基づく配列の実態から、鷹匠埴輪が被葬者（支配者層）の姿を表現したものではなく、その支配下におかれた武人や力士と同等級の職能技術者の姿で、鷹匠埴輪は、鷹甘の正装した姿を表していることを指摘した。また、鷹狩りと馬が一体となった騎馬スタイルは、日本では渡来当初から成立していないことを指摘した。

さらに、鷹甘によって飼育・訓練された鷹に装着された鷹鈴の存在が、渡来文化としての根拠であることを指摘した。鷹鈴を鷹の尾羽に装着することは、朝鮮半島と日本の鷹狩りの共通点として認識でき、朝鮮半島の高句麗や百済で盛んであった鷹狩りが、日本では鷹甘部として組織化され、6世紀代に急速に拡充及び定着したことを指摘する。

## キーワード

鷹甘, 鷹形埴輪, 鷹匠埴輪, 高句麗壁画古墳, 鷹鈴, 渡来文化

## Archeological Evidence for a Cultural History Study of *Takakai*

KIMINE Osamu

## Abstract

*Takakai* [鷹甘; also written as 鷹飼] means falconry, and is a term recorded in *Nihon Shoki* [the Chronicles of Japan]. The *takakai-be*, a professional group responsible for the breeding, training, and management of raptors, was formed during the reign of Emperor Nintoku.

Although previous research suggests that falconry was introduced in to Japan from abroad, very few studies have focused on this question from the perspective of cultural history. Existing studies have drawn

on theories based on archaeological material, such as the characteristics of the *haniwa* (clay figures found with the dead as funerary objects) of falconers: these are problematic owing to the approaches of prior researchers.

This paper approaches falconry from a cultural history perspective based on analyses of archeological materials including: (1) *haniwa* of raptors; (2) *haniwa* of falconers; and (3) falconry figures from Koguryo mural tumuli, while focusing on the relationship between falconry in Japan and on the Korean peninsula.

The results of this study show that the actual arrangement of the falconer *haniwa* indicates that they were not representations of the entombed (ruler-level) figures. Rather, they represented falconers in full dress as professional artisans, on the same level as warriors and sumo wrestlers under the ruler's control. Further, the "mounted style" that united falconer and horse, was not present in Japan when cultural imports from abroad began.

Bells attached to the tail feathers of raptors in Japan are similar to those used in falconry on the Korean peninsula. This suggests that falconry, which flourished in Koguryo and Paekche on the Korean peninsula, became organized into the *takakai-be* in Japan, rapidly expanding and becoming more established in the sixth century.

#### Keywords:

*takakai*, raptor *haniwa*, falconer *haniwa*, Koguryo mural tumuli, raptor bells, introduced culture

## 1 はじめに

鷹甘は『日本書紀』巻第11・仁徳43年9月条に記載された用語で、鷹飼とも書かれる。『日本書紀』では、鷹狩りで用いる鷹の飼育と調教・管理を行った職能集団である鷹甘部が、仁徳天皇の時代に組織化されたことが記載されている。鷹狩りについては、律令時代に入ると朝廷の職制のひとつとして主鷹司が置かれ、戦国時代には各武将に好まれ盛んとなり、江戸時代に入ると鷹の飼育と調教を行い、將軍の鷹狩りに随行する職制として、鷹匠といった名称が使用された。現在では、鷹狩り及び鷹の飼育と調教・管理といった鷹狩りに関する技能全般を含めて、放鷹と呼んでいる。

鷹狩りに関する史的研究は、宮内省式部職編『放鷹』(1931)<sup>1</sup>に始まる。『放鷹』では、日本の鷹狩りの始まりを『日本書紀』の記載に求め、日本の鷹狩りのみならず、朝鮮放鷹史に比重を置いている点が注目される。戦後の日本放鷹史研究は、加藤秀幸(1969・1975・1976)<sup>2</sup>によって進められ、特別展も開催された(大田区立郷土博物館1988)<sup>3</sup>。平成に入ってから、橋口尚武(1993・

1998)<sup>4</sup>によって進められ、律令時代の主鷹司及び官制養鷹に関しては、秋吉正博(2004)<sup>5</sup>による総合的な研究がある。さらに近年、荻島大河(2011)<sup>6</sup>によって、鷹匠技術面からの検討を中心に、『日本書紀』記載に関する検討が試みられている。

考古資料の分析による鷹狩りに関する研究は、相川龍雄(1931)<sup>7</sup>による鷹匠埴輪に装着された鷹の埴輪の紹介に始まる。戦後の考古学では実証的研究の確立が進み、末永雅雄(1962)<sup>8</sup>によって大和文華館所蔵の鷹匠埴輪が紹介された。末永は、鷹匠の腕にのる鷹に装着された鈴に注目して人によって訓練された鷹であることを指摘し、鷹狩りが、中国・朝鮮・日本へと一貫して変化のない狩猟法であったことを述べる。末永の見解以降、考古資料を対象とした鷹狩りの研究は、鷹匠埴輪の性格論を中心に展開する。水野正好(1971)<sup>9</sup>は、鷹匠埴輪の服飾表現に注目し、職業的集団内における階級差を指摘するが、平成に入り、塚田良道(1992)<sup>10</sup>は、鷹匠埴輪が盛装男子全身立像の一つで「鷹を腕にのせる支配者層の人物」の姿であることを提言する。この提言は、榎村寛之

(1995)<sup>11</sup>、賀来孝代 (2004)<sup>12</sup>、若狭徹 (2009)<sup>13</sup>らによって支持されてきた。また、榎村 (1995) は、鷹狩りを騎馬民族による狩猟スタイルとし、日本では鷹狩りと騎馬が同じ頃に渡来したという考えを示し、「馬と鷹は、畿内王権の超越的な権力の象徴」として東国進出に使われたとの見解を述べる。賀来 (2004) は、古くは鷹狩りを生業とするよりも、有力者のために鷹を飼育して、訓練を施すのが鷹匠であったことを述べ、「鷹狩りを行う人物は、鷹の世話をする鷹匠ではなく、鷹匠の主人にあたる人物であり、主人が腕にタカをとめ、自ら獲物に向かって放ったに違いない」即ち「鷹狩りに臨む人物は、その姿にふさわしい有力者であった」と述べる。一方で塚田 (1992)<sup>14</sup>の提言を支持する姿勢をとりながらも、亀井正道 (1995)<sup>15</sup>は、鷹匠埴輪は、「狩猟儀礼の一環として、鷹を据え、葬祭に参列した姿」であるとの意見もある。また、鷹に関する考古資料の詳細な検討を行った大塚美恵子 (1996)<sup>16</sup>によって、それまでの考古資料を中心とした鷹に関する研究史のとりまとめもなされている。

従前の研究では、鷹甘は、放鷹史の一角として『日本書紀』の記載に基づき、鷹狩りが渡来文化であることが認識されてきたに過ぎず、渡来文化としての検証も曖昧のままに、文化史的側面から鷹甘に関する具体的な資料の分析と追究がほとんど行われてこなかった。特に考古資料を中心とした分析では、専ら鷹匠埴輪の性格論に固執してきたと言っても過言ではない。この点が、研究史上の問題点として指摘できる。

本論では、先ず渡来文化としての通説の根拠となった史料を紹介したうえで、(1)鷹形埴輪、(2)鷹匠埴輪、(3)高句麗壁画古墳の鷹狩り図といった考古資料の分析による比較検討に基づき、朝鮮半島の鷹狩りとの関係を考察し、古墳時代鷹甘の実態を見極めたい。

## 2 文献史料の紹介

[史料1] 『日本書紀』巻第11・仁徳43年9月条

四十三年秋九月庚子朔、依網屯倉阿弭古捕異鳥獻於天皇曰、臣每張網捕鳥、未曾得是鳥之類。故奇而獻之。天皇召酒君示鳥曰、是何鳥矣。酒君對言、此鳥類多在百濟。得馴而能從人、亦捷飛之掠諸鳥。百濟俗号此鳥曰俱知。是今時鷹也。乃授酒君令養馴。未幾時而得馴。酒君則以韋縶著其足、以小鈴著其尾、居腕上、獻于天皇。是日、幸百舌鳥野而遊獵。時雌雄多起。乃放鷹令捕。忽獲數十雉。是月、甫定鷹甘部。故時人号其養鷹之処曰鷹甘邑也。

(四十三年の秋九月の庚子の朔に、依網屯倉の阿弭古、異鳥を捕へて天皇に献りて曰さく、「臣、毎に網を張りて鳥を捕ふるに、未だ曾て是の鳥の類を得ず。故、奇しびて献る」とまをす。天皇、酒君を召し鳥を示せて曰はく、「是、何鳥ぞ」とのたまふ。酒君、對へて言さく、「此の鳥の類、多に百濟に在り。馴け得ては能く人に従ひ、亦捷く飛びて諸鳥を掠む。百濟の俗、此の鳥を号けて俱知と曰ふ」とまをす。是、今時の鷹なり。乃ち酒君に授けて、養ひ馴けしめたまふ。幾時もあらずして馴くること得たり。酒君、則ち韋縶の縶を以ちて其の足に著け、小鈴を以ちて其の尾に著け、腕の上に居あて、天皇に献る。是の日に、百舌鳥野に幸して遊獵したまふ。時に雌雄、多に起つ。乃ち鷹を放ちて捕らしむ。忽に数十の雉を獲つ。是の月に、甫めて鷹甘部を定む。故、時人、是の鷹を養ふ処を号けて鷹甘邑と曰ふ。)

史料1は、仁徳天皇によって鷹甘部が新設された記事である。

仁徳41年3月条によれば、酒君は百済王の親族である。百済に遣わされた紀角宿禰に礼を失したことで、百済王は酒君を鉄の鎖で縛って、襲津彦に託して進上したとある。『日本書紀』巻第10の応神3年歳時条に、百済の辰斯王が天皇に礼を失したので、紀角宿禰ほか3名を遣わして無礼を責め、百済は辰斯王を殺して謝罪したとある。

酒君は、倭国に來た後は、百濟系の氏族とみられる石川錦織首許呂斯の元に逃げ隠れていたが、仁徳天皇による許しが出てからは、鷹甘部の新設に関わって厚遇されたものと考えられる。酒君をかくまった石川錦織首許呂斯は、百濟系渡來人が多くいた河内国の石川郡（現在の大阪府南河内郡付近）にいたといわれている。

また、俱知は百濟語の鷹である。酒君の言葉から、既に百濟では鷹を飼い馴らし、鷹狩りの技術が定着していたことが読み取れる。百舌鳥野（現在の大阪府堺市付近）での鷹狩りに伴って、酒君を中心に、鷹を飼い馴らして、鷹狩りに従事する特殊な技能者の集団として、鷹甘部が組織化されたことが読み取れる<sup>17</sup>。

〔史料2〕『播磨国風土記』揖保郡・鈴喚岡

所以号鈴喚者、品太天皇之世、田杵此岡、鷹鈴墮落、求而不得、故号鈴喚岡。

（鈴喚と号ける所以は、品太天皇の世に、此の岡に田したまひしに、鷹の鈴墮落ち、求むれど得ず、故に鈴喚岡と号ける）

『風土記』是和銅6（713）年に元明天皇の命によって編纂されたもので、諸国の地誌が調査されて記述された。『播磨国風土記』は、霊亀元（715）年までに編纂されたといわれている。

鷹狩りの訓練を受けた鷹の象徴である尾羽の鈴に関して、鷹狩りで鷹の鈴を落として紛失したこ

とが記載されている。地名伝承の記事ではあるが、仁徳天皇より前の応神天皇の時代に鷹狩りが行われていたことを伝える史料として認識されてきた<sup>18</sup>。『播磨国風土記』では、応神天皇の巡行及び狩猟記事が多く記載されている（八木1959）<sup>19</sup>。

日本では鷹狩りの訓練を受けた鷹は、足に紐、尾羽に鈴板とその上に鈴が付けられるのが、基本的なスタイルである（図1）。尾羽の鈴（以下、鷹鈴と呼ぶ。）は、鷹狩りの訓練を受けた鷹の象徴といえる。

史料2は、日本における鷹狩りに関する記事の初出であるが、放鷹史では史料1が重視されてきた。史料1によれば、仁徳天皇の時代に鷹を飼い馴らすことが始まり、仁徳天皇によって、鷹狩りに従事する特殊な技能者集団である鷹甘部が組織化されたとされており、これに基づき、鷹狩りの技術とその系譜は、朝鮮半島の百濟に求められるといった認識が通説となっている。

### 3 考古資料の分析

次に本論の中心となる鷹及び鷹狩りに関する考古資料について整理し、分析検討を行いたい。

#### (1) 鷹形埴輪

鷹形埴輪は、形象埴輪のうち動物埴輪の鳥形埴輪に属する。水鳥や鶏に比べて、鷹と認識できる埴輪は極めて少ない。概ね鷹として認識できる主な鳥形埴輪は、表1及び図2に示したとおりである。

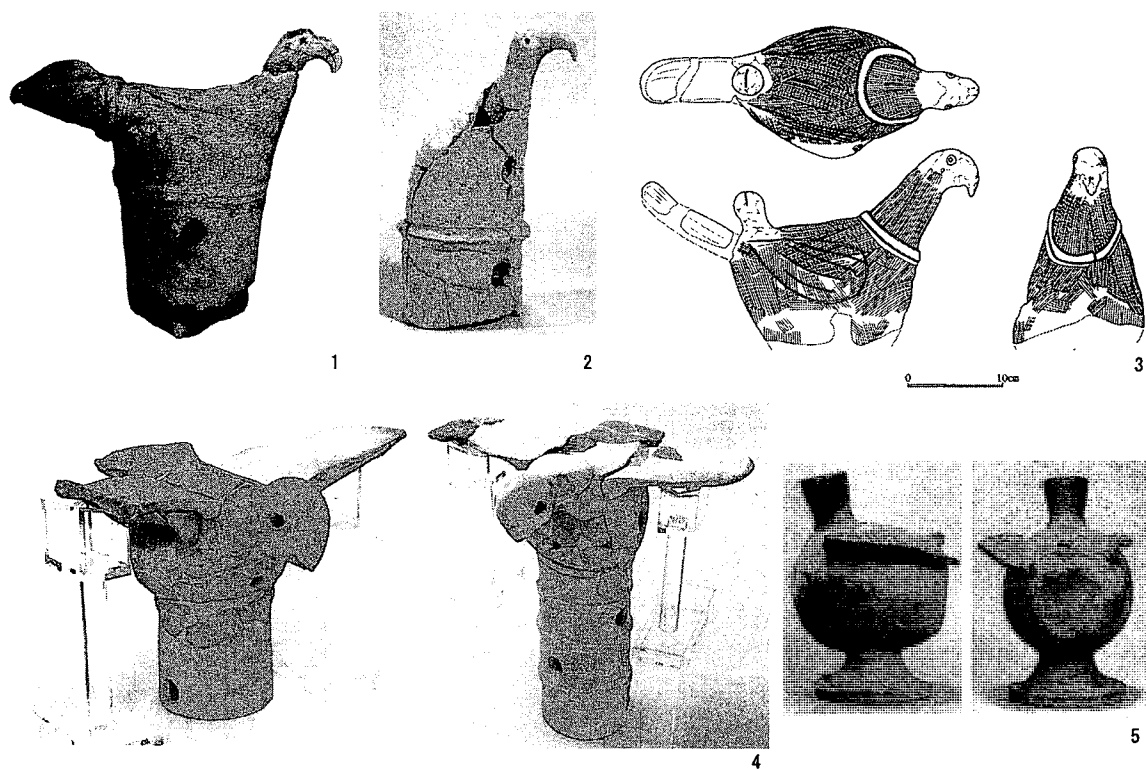
鷹狩りの訓練を受けた鷹の象徴である尾羽に鷹鈴が付いた鷹形埴輪は、伝大室出土資料（伝群馬県前橋市）のみであるが、原山1号墳（福島県泉崎村）出土の鷹形埴輪では尾羽の根元に環（輪）が付けられており、鷹鈴が付いていた可能性が考えられる。古墳出土資料としては、須恵器の両翼を広げた鳥形平瓶の尾付近に鷹鈴が付いたものが、赤堀村32号墳（群馬県伊勢崎市）から出土している。鷹鈴が付くことが認識できる資料に関し



図1 鷹の尾羽に付けられた鈴（筆者撮影）

表1 鷹を表現した埴輪及び須恵器一覧表

| No | 種別  | 出土地         | 古墳名<br>(出土地名) | 埴形／<br>規模     | 時期  | 全長<br>cm | 高さ<br>cm | 目の表現 | 嘴の形状 | 羽の表現       | 尾羽の鈴 | その他           | 文献         |
|----|-----|-------------|---------------|---------------|-----|----------|----------|------|------|------------|------|---------------|------------|
| 1  | 埴輪  | 福島県<br>泉崎村  | 原山<br>1号墳     | 前方後円／<br>全長-m | 5c末 | (37.0)   | (36.5)   | 竹管刺突 | 湾曲   | 刷毛目        | 不明   | 尾羽根元に環<br>(輪) | 註20        |
| 2  | 埴輪  | 神奈川県<br>横浜市 | 富士山古墳         | 円／<br>全径29m   | 6c中 | (22.0)   | (26.5)   | 竹管刺突 | 湾曲   | —          | ×    | —             | 註11<br>・16 |
| 3  | 埴輪  | 群馬県<br>前橋市  | (伝大室)         | —             | 6c後 | (26.3)   | (20.3)   | 竹管刺突 | 湾曲   | 線刻         | ○    | 首に紐           | 註16        |
| 4a | 埴輪  | 和歌山県        | 大日山           | 前方後円／         | 6c前 | —        | —        | 穿孔   | 尖る   | 翼状         | ×    | 両翼を広げる        | 註24        |
| 4b | 埴輪  | 和歌山市        | 35号墳          | 全長105m        |     | (74.0)   | (73.0)   | 穿孔   | 尖る   | 翼状         | ×    | 両翼を広げる        | 註24        |
| 5  | 須恵器 | 群馬県<br>伊勢崎市 | 赤堀村<br>32号墳   | 円／<br>全径42m   | 7c  | (16.0)   | 22.2     | —    | —    | 翼状<br>(線刻) | ○    | 両翼を広げる        | 註25        |



1 原山1号墳 2 富士山古墳 3 伝大室出土 4 大日山35号墳 5 赤堀村32号墳

図2 鷹形埴輪・須恵器鷹形平瓶(註11・16・20・24c・25文献から)

ては、鷹狩りの訓練を受けた鷹を表現したものと考えられる。富士山古墳(神奈川県横浜市)及び大日山35号墳(和歌山県和歌山市)出土の資料は、嘴などの形状から鷹らしき鳥(猛禽類に属する鳥)として認識できるものである。大日山35号

墳出土の2羽の鳥形埴輪は、両翼を広げて飛行する姿勢で、実に躍動感に溢れている。

以下、鷹形埴輪の特徴を整理し、出土状況を検証することで性格分析の基礎資料とする。

○原山1号墳の鷹形埴輪(福島県泉崎村)<sup>20</sup>

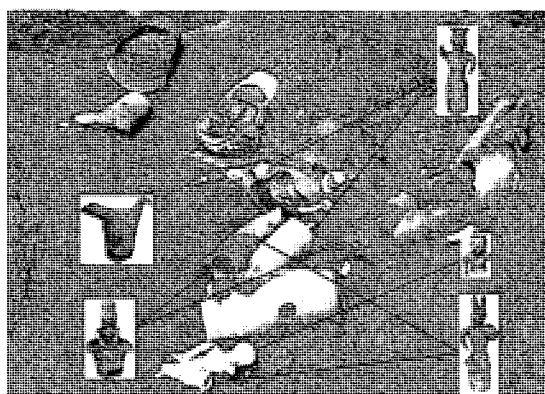


図3 原山1号墳の埴輪出土状況（註20文献から作成）

原山1号墳は、規模不明の前方後円墳で、5世紀末の築造と考えられている。鷹形埴輪は、墳丘くびれ部西側の周溝内から、人物埴輪（男子・女子・盾持・琴弾き・力士）と円筒埴輪とともに崩落した状態で出土している。出土状況では、人物埴輪が後円部側の位置に配列され、鷹形埴輪は前方部側の位置に配列されていたことが推定できる（図3）。

鷹形埴輪は、嘴が鋭く下に曲がる。目は盲孔でその後方に耳の表現らしき孔がある。胴部はなだらかで丸みをおび、両翼は刷毛目で表現されている。尾羽は水平に伸び、根元に環（輪）がはめられ、環（輪）の上に鷹鈴が装着されていた可能性がある。基部は円筒である。嘴の形状と尾羽の根元にある環によって、鷹形埴輪と考えられている。○富士山古墳の鷹形埴輪（神奈川県横浜市）<sup>21</sup>

富士山古墳は長径29mの円墳で、6世紀中頃の築造とされる。鷹形埴輪は、西南側の周溝内から、人物埴輪と円筒埴輪とともに出土した。

鷹形埴輪は、嘴が鉤形で鋭く屈曲する。目は竹管で施され、両翼の表現はなく、尾は欠損する。基部は円筒である。嘴の形状から、鷹形埴輪と考えられている。

○伝大室出土の鷹形埴輪（伝群馬県前橋市）<sup>22</sup>

出土古墳及び出土状況は不明である。中之条町歴史民俗資料館の所蔵資料である。

鷹形埴輪は、頭部は丸みをおび、嘴が鉤形で下

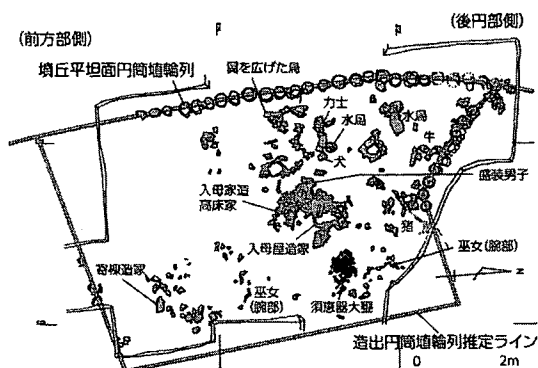


図4 大日山35号墳東側造り出しの埴輪出土状況（註24c文献から）

に曲がる。目は竹管で押捺され、鼻孔が篋切りで表現されている。首部に幅1cmの紐が巻かれている。扁平な尾羽の根元に直径3.2cmの球形を呈する鈴が上に向かって付けられている。両翼は、胴部に線刻で表現される。円筒の基部に接合しているが、別個体の朝顔形埴輪であることが理解されている。鷹鈴が見られることから、訓練された鷹甘の鷹を表現したものと考えられるが、首にある紐の表現が気にかかる点として指摘できる<sup>23</sup>。

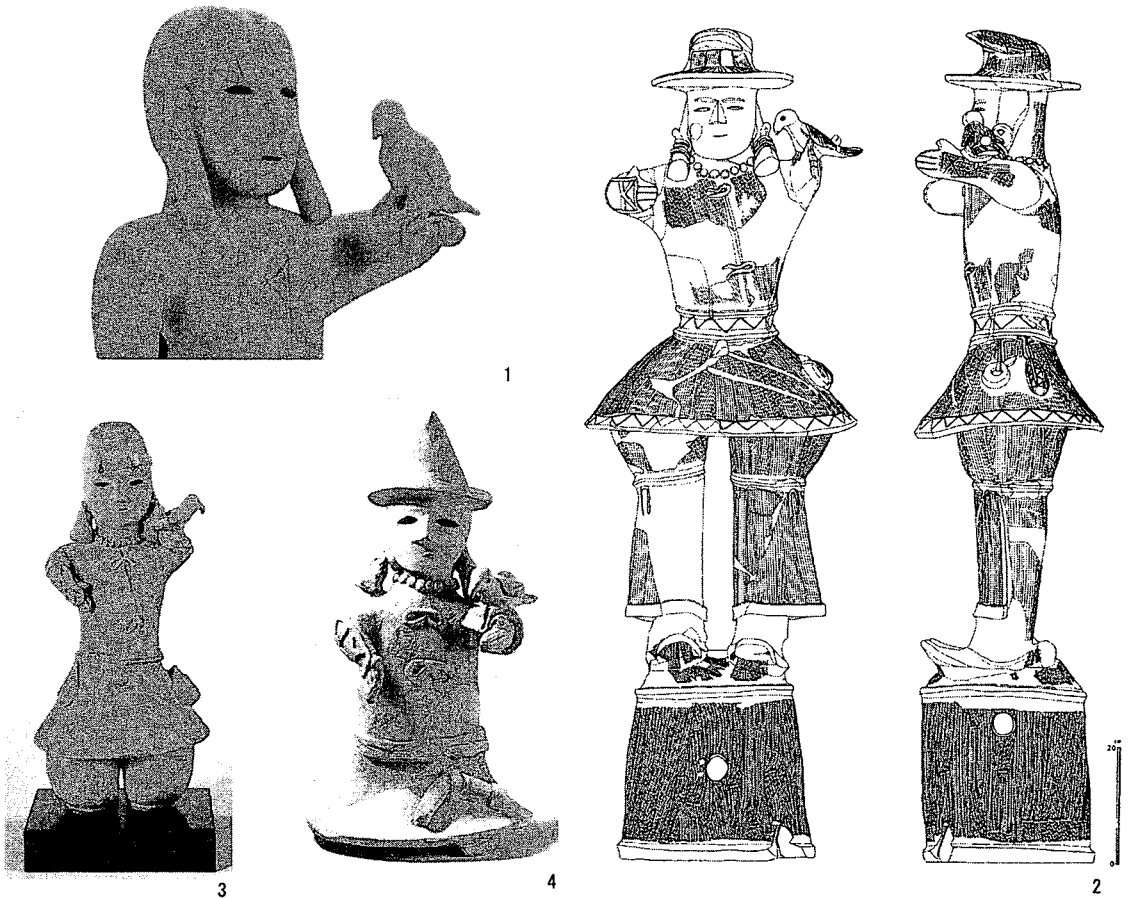
○大日山35号墳の鳥形埴輪（和歌山県和歌山市）<sup>24</sup>

大日山35号墳は、岩橋千塚古墳群を形成する古墳のひとつで、全長約105mの前方後円墳である。6世紀前半の築造と考えられている。両翼を広げた鷹と考えられる埴輪は、墳丘裾部に位置する東側造り出しから、家形埴輪を中心に動物埴輪（水鳥・牛・猪）・人物埴輪（男子・力士）とともに出土している。出土状況によれば、中央部に入母屋造の高床の家と別の入母屋造と推定される平屋の家形埴輪が並び、その西側に盛装男子人物、両翼を広げた鷹と考えられる埴輪（2個体）、力士、水鳥（3個体）・犬・牛・猪といった動物の一群が配列されていたことが理解できる（図4）。

鷹と考えられる埴輪は、2個体ともに同様の器形である。球状の丸い頭部に、嘴は先端が尖る。目は穿孔で、鼻孔も表現されている。球体に近い体部に水平の尾羽と広げた両翼が取り付けられており、全体的に小孔があげられている。尾羽の根元

表2 鷹匠埴輪の一覧表

| No. | 出土地         | 古墳名<br>(出土地名) | 埴形／規模           | 時期  | 形状／規模               | 籠手 | 鷹留 | 鷹向 | 頭髮／被り物／衣服<br>／裝飾／付帯                           | 所蔵先          | 文献  |
|-----|-------------|---------------|-----------------|-----|---------------------|----|----|----|-----------------------------------------------|--------------|-----|
| 1   | 大阪府<br>高槻市  | 今城塚古墳         | 前方後円／<br>全長350m | 6c前 | 男子全身立像a<br>／－       | ○  | 左腕 | 内側 | 美豆良結／無／革甲<br>状・帯（垂飾）・袴<br>／無／無                | 今城塚古代<br>歴史館 | 註26 |
|     |             |               |                 |     | 男子全身立像b<br>／－       | ○  | 左腕 | 内側 | －                                             |              |     |
| 2   | 群馬県<br>太田市  | オクマン山<br>古墳   | 円／<br>全径29m     | 6c後 | 男子全身立像<br>／1.47m    | ○  | 左腕 | 内側 | 美豆良結／帽子／左<br>衽結び紐・帯・袴／<br>首飾り／（大刀）・<br>（靱）・餌奮 | 東毛歴史<br>資料館  | 註27 |
| 3   | 群馬県<br>伊勢崎市 | （境淵名）         | －               | 6c後 | 男子全身立像<br>／（76.0）cm | ○  | 左腕 | 外側 | 美豆良結／帽子／左<br>衽結び紐・帯・袴／<br>首飾り／大刀・靱            | 大和文華館        | 註8  |
| 4   | 不明<br>（関東か） | 不明            | －               | 6c後 | 男子全身立像<br>／（57.0）cm | ○  | 左腕 | 内側 | 美豆良結／帽子／左<br>衽結び紐・帯・袴／<br>首飾り／刀               | 四天王寺宝<br>物館  | 註29 |



1 今城塚古墳 2 オクマン山古墳 3 境淵名出土（大和文華館蔵） 4 出土地不明（四天王寺宝物館蔵）

図5 鷹匠埴輪（註11・26d・27b・29文献から）



に鷹鈴の装着は見られない。基部は円筒である。  
○赤堀村32号墳の須恵器鷹形平瓶（群馬県伊勢崎市）<sup>25</sup>

赤堀村32号墳は、全径42mの円墳で、7世紀初頭の築造と考えられている。埋葬施設である横穴式石室の前庭から、須恵器の鷹形平瓶が出土している。

鷹形平瓶は、口縁部～頸部が頭部に見立てられたもので、球体状を呈する体部の上面に広げた両翼と尾羽の根元の位置に鈴が付けられている。翼には篋描き線によって羽根が表現されている。体部の下には台部が付けられる。鷹鈴が見られることから、訓練された鷹甘の鷹を表現したものである。

訓練された鷹甘の鷹を表現したと考えられるのは、伝大室出土の鷹形埴輪及び赤堀村32号墳の須恵器鷹形平瓶2点である。赤堀村32号墳では、前庭の造り直しが行われており、7世紀初頭以降の追葬時における墓前での供献儀礼で使用された可能性が高い。5世紀末の原山1号墳及び6世紀前

半の大日山35号墳の出土状況からは、鷹形埴輪は単独での配置形態を取るものではなく、墳丘裾部に設置された埴輪祭祀場にて、人物埴輪などと一緒に儀礼空間を構成する一部であったことが理解できる。

## (2) 鷹匠埴輪

鷹匠埴輪は、形象埴輪のうち人物埴輪に属する。他の人物埴輪に比べて出土資料の点数が僅かではあるが、畿内とその周辺地域及び群馬県地域を中心とした東国の古墳で樹立される（表2）。男子全身立像を基本とする（図5）。

以下、鷹匠埴輪の特徴を整理し、出土状況を検証することで性格分析の基礎資料とする。

### ○今城塚古墳の鷹匠埴輪（大阪府高槻市）<sup>26</sup>

今城塚古墳は、全長350mの二重周溝を有する大型前方後円墳で、墳長は190mである。6世紀前半築造で、埋葬施設は横穴式石室であったと推定できる。継体天皇の陵墓と考えられている。

鷹匠埴輪は、内堤北側の張出区画に設置された埴輪祭祀場の200点以上におよぶ形象埴輪群のうち、最も南側の区画に配列する。白鳥や馬などの動物埴輪の列の北側に、武人埴輪と並列して列状（2体の鷹匠埴輪が推定復元）に配置される（図6）。鷹匠埴輪は、男子全身立像である。髪髪は

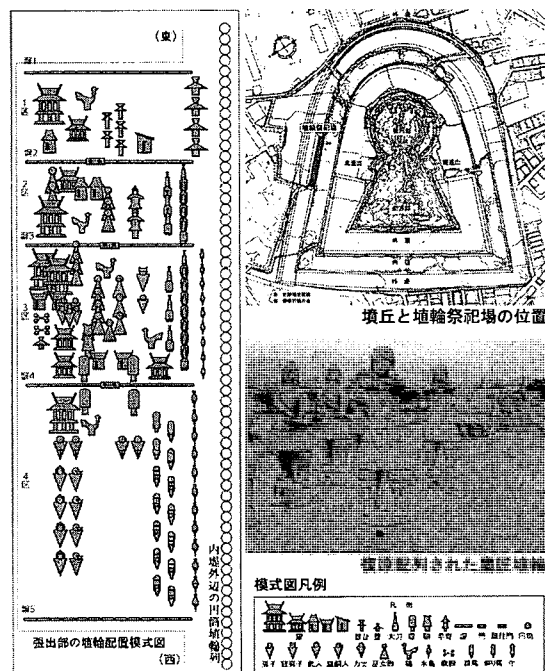


図6 今城塚古墳の埴輪祭祀場と鷹匠埴輪の配列  
（註24c文献から作成・写真は筆者撮影）

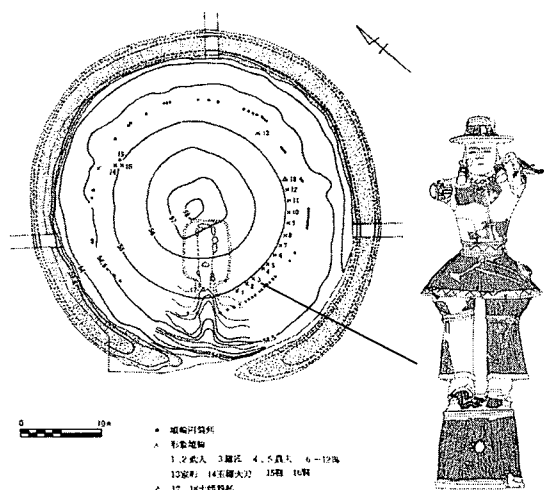


図7 オクマン山古墳の鷹匠埴輪の配列  
（註27a・b文献から作成）

表3 鷹匠埴輪の鷹一覧表

| No. | 出土地          | 古墳名<br>(出土地名) | 墳形／規模           | 時期  | 全長<br>cm | 幅<br>cm | 目の表現   | 嘴の形状 | 羽の表現 | 尾羽の鈴 | その他 (所蔵館等)              | 文献  |
|-----|--------------|---------------|-----------------|-----|----------|---------|--------|------|------|------|-------------------------|-----|
| 1   | 大阪府<br>高槻市   | 今城塚古墳         | 前方後円／<br>全長350m | 6c前 | —        | —       | (竹管刺突) | (湾曲) | (線刻) | (○)  | 今城塚古代歴史館                | 註26 |
| 2   | 和歌山県<br>和歌山市 | 井辺八幡山<br>古墳   | 前方後円／<br>全長88m  | 6c前 | 15.4     | 6.5     | 竹管刺突   | 湾曲   | 線刻   | ×    | —                       | 註30 |
| 3   | 奈良県<br>天理市   | 星塚2号墳         | 前方後円／<br>全長41m  | 6c中 | (11.5)   | (5.2)   | 竹管刺突   | 湾曲   | 線刻   | 不明   | —                       | 註31 |
| 4   | 不明<br>(近畿か)  | 不明            | —               | 6c  | 13.1     | —       | 竹管刺突   | 直    | —    | ○    | 近つ飛鳥博物館                 | 註32 |
| 5   | 群馬県<br>太田市   | オクマン山<br>古墳   | 円／<br>全径29m     | 6c後 | 15.0     | —       | 竹管刺突   | 湾曲   | 線刻   | ○    | 東毛歴史資料館                 | 註27 |
| 6   | 群馬県<br>伊勢崎市  | (境淵名)         | —               | 6c後 | 13.3     | —       | 竹管刺突   | 湾曲   | 線刻   | ○    | 大和文華館                   | 註8  |
| 7   | 群馬県<br>伊勢崎市  | (波志江町)        | —               | 6c後 | —        | —       | —      | —    | —    | ○    | 國學院大学<br>考古学資料館         | 註12 |
| 8   | 群馬県<br>太田市   | (成塚)          | —               | 6c後 | 17.0     | 5.4     | 竹管刺突   | —    | —    | ○    | —                       | 註7  |
| 9   | 群馬県<br>藤岡市   | (本郷)          | —               | 6c後 | —        | —       | 竹管刺突   | 湾曲   | 線刻   | ○    | —                       | 註7  |
| 10  | 不明<br>(関東か)  | 不明            | —               | 6c後 | 14.4     | 4.6     | 竹管刺突   | 湾曲   | 線刻   | ○    | 四天王寺宝物館                 | 註29 |
| 11  | 不明           | 不明            | —               | 6c後 | 17.8     | —       | 竹管刺突   | —    | —    | ○    | 『THE ART OF<br>JAPAN』掲載 | 註35 |

水豆良結いで、被り物はない。革甲状の衣服に身を包み、正面に垂飾のある腰帯を巻き、袴は脚結で絞る。腕には籠手を付け、右腕を下げ、左腕を前方に挙げた姿勢をとり、前方に挙げた左腕に鷹が留まる。鷹は足のみが残り、内側を向く。

○オクマン山古墳の鷹匠埴輪 (群馬県太田市)<sup>27</sup>

オクマン山古墳は、墳丘直径22mの円墳で、幅3.5mの周溝が巡る。6世紀後半築造で、埋葬施設は全長8mの横穴式石室である。石室の入口東側に、武人・鷹匠・農夫といった順序で人物埴輪群が配列される (図7)。

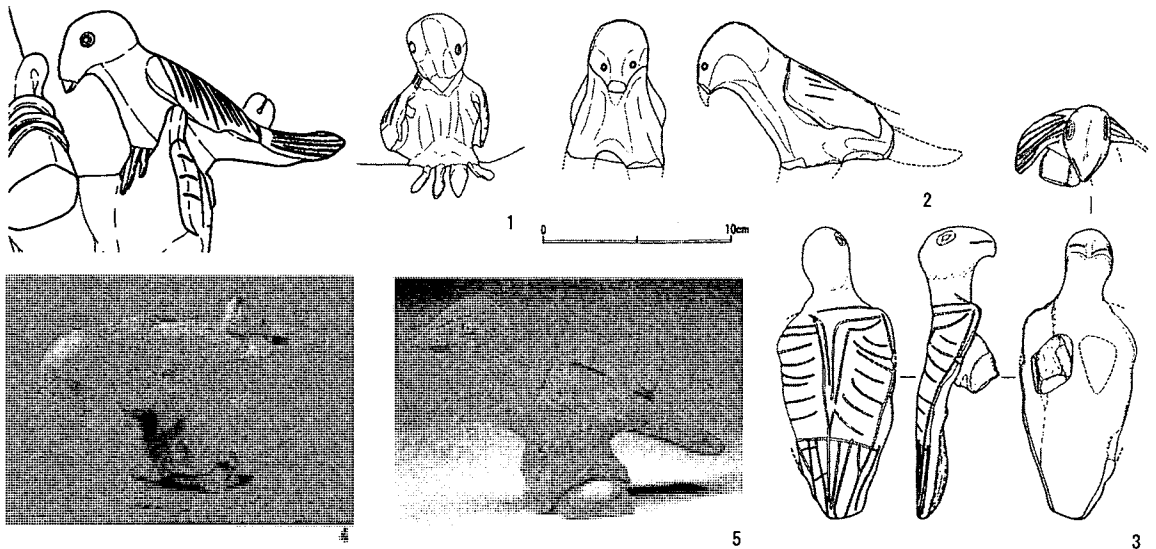
鷹匠埴輪は、男子全身立像で、器台を含めて高さ約1.47mを測る (足首より上と足及び器台が別個体)。頭に鍔の廻る帽子を被り、頭髮は水豆良結いである。丸玉で首元を飾り、上衣は左衽の服で、正面に2カ所の結び紐がみられ、袴は脚結で絞られている。腰に鋸歯文の施された広帯を廻し、大刀と鞘を下げた痕跡と左側に餌畚 (餌を入

れる腰付籠) を下げる。籠手を付けた両腕を前方に挙げた姿勢をとり、左腕に鷹が留まる。鷹は内側を向き、目と嘴、翼及び尾羽と鷹鈴が表現される。

○大和文華館所蔵の鷹匠埴輪 (群馬県伊勢崎市)<sup>28</sup>

境淵名 (群馬県伊勢崎市) 出土の鷹匠埴輪で、大和文華館 (奈良県奈良市) 所蔵の国指定重要文化財である。6世紀後半の男子全身立像と考えられるが、膝から下を欠損する。残存高は約76cmである。頭には赤色塗彩の施された帽子を被り、頭髮は水豆良結いである。オクマン山古墳の鷹匠埴輪同様に、丸玉で首元を飾り、上衣は左衽の服で、正面に2カ所の結び紐がみられる。腰帯の正面に大刀、左側に鞘を下げる。両腕に籠手を付け、右腕を下げ、左腕を前方に挙げた姿勢をとり、左腕に鷹が留まる。鷹は外側を向き、目と嘴、翼及び尾羽と鷹鈴が表現される。

○四天王寺宝物館所蔵の鷹匠埴輪 (出土地不明)<sup>29</sup>



1 オクマン山古墳 2 星の宮2号墳 3 井辺八幡山古墳 4 近つ飛鳥博物館蔵 5 『THE ART OF JAPAN』掲載

図8 鷹匠埴輪の鷹(註27b・30・31・32・35文献から)

6世紀後半の男子全身立像と考えられるが、脚部から下を欠損する。残存高は約57.0cmである。頭には鍔が廻り尖端が尖った円錐状の帽子を被り、頭髪は水豆良結いである。オクマン山古墳及び大和文華館所蔵の鷹匠埴輪同様に、丸玉で首元を飾り、上衣は左衽の服で、正面に2カ所の結び紐がみられる。腰帯の正面に曲がった刀を下げる。籠手を付けた右腕を前方に下げ、革状のものを巻き付けた左腕を前方に挙げた姿勢をとり、左腕に鷹が留まる。鷹は正面に近い内側を向き、目と嘴、翼及び尾羽と鷹鈴が表現される。

以上の鷹匠埴輪は、全体像の把握が可能な資料であるが、鷹匠埴輪の腕に留まっていたと考えられる鷹は、近畿周辺では井辺八幡山古墳(和歌山県和歌山市)<sup>30</sup>、星塚2号墳(奈良県天理市)<sup>31</sup>、大阪府立近つ飛鳥博物館所蔵<sup>32</sup>などの資料が知られる(表3、図8)。井辺八幡山古墳の鷹は、目と嘴、翼及び尾羽が表現されるが、鷹鈴の表現がない。星塚2号墳の鷹は、尾羽を欠損しており鷹鈴があったかどうかはわからない。大阪府立近つ飛鳥博物館所蔵資料では、尾羽に鷹鈴が付いている。井辺八幡山古墳は6世紀前半、星塚2号墳は6世紀中頃の築造である。他に、成塚(群馬県太

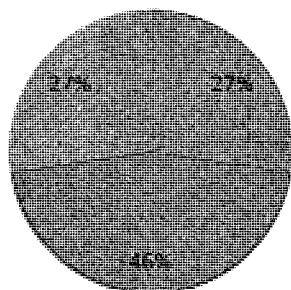
田市)及び本郷(群馬県藤岡市)出土<sup>33</sup>、國學院大学考古学資料館所蔵(群馬県伊勢崎市出土)<sup>34</sup>、『THE ART OF JAPAN』(1991)掲載のもの(出土地不明)<sup>35</sup>などが知られ、いずれも尾羽の根元に鷹鈴が付けられている。鷹匠埴輪は、6世紀前半～中頃にかけての近畿周辺、6世紀後半では群馬県地域を中心とした北関東の地域で専ら造立されたことが理解できる(グラフ1)。

鷹匠埴輪の共通点は、いずれも6世紀代の資料で、(1)男子全身像(頭髪是水豆良結い)、(2)両腕に籠手を付け、左腕を前方に挙げる、(3)左腕に鷹が留まる、といった点である。相違点は、(1)帽子の有無、(2)衣服形状と装飾品の有無、(3)右腕の位置、といったところである。腕と留まる鷹の向きに関しては、内側を向くのが基本姿勢であることが従前より指摘されている<sup>36</sup>。帽子の有無と衣服形状と装飾品の有無に関しては、今城塚古墳の鷹匠埴輪を除くと、むしろ共通点ともいえる。鷹に関しては、尾羽に鷹鈴が付くといった共通点があげられる(グラフ2)。

鷹匠埴輪は、現状では6世紀前半の畿内の大王墓(今城塚古墳)を初現として、6世紀中頃までに畿内とその周辺地域の地域首長墓(井辺八幡山

グラフ 1 鷹匠埴輪の鷹・出土地域と時期の比較

■近畿周辺:6c前~中      ■関東(群馬):6c後      ■不明

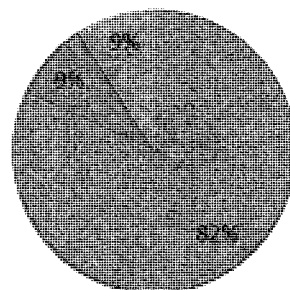


古墳・星塚2号墳）へと拡がり、6世紀後半には群馬県地域を中心とした東国の地域首長墓（円墳級）において積極的に取り入れられていったことが理解できる。6世紀前半～後半にかけて、天皇陵、そして後の国造級、郡長や郷長級の墳墓へと速やかに受容されている。言い換えれば、鷹甘の組織化は、首長の象徴ともいえよう。

鷹匠埴輪の今城塚古墳での堤上埴輪儀礼空間（埴輪祭祀場・図6）や井辺八幡山古墳の墳丘裾部造り出し儀礼空間での配列（図9）は、武人や力士と並列及び順列することから、被葬者が掌握した職能集団での鷹匠の地位の安定度が窺える。畿内周辺での鷹匠埴輪の実態及び儀礼空間での配列を見る限り、鷹匠埴輪が被葬者（支配者層）の姿であるとの提言は肯定できない。鷹匠埴輪は、

グラフ2 鷹匠埴輪の鷹・尾羽の鈴有無の比較

☐ 鈴有り ☐ 鈴無し ☐ 不明



現代の日光東照宮（栃木県日光市）の神事行事での姿（図10）のように<sup>37</sup>、鷹甘の正装した姿を表しているものと考えられる。

鷹匠埴輪の検討によれば、鷹甘の組織化は6世紀に急速に進んだことは確実である。形象埴輪は、4世紀代の家・盾などの器財埴輪や鶏・水鳥などの鳥形埴輪が出現し、5世紀後半には巫女・武人などの各種の人物埴輪及び馬形埴輪などの動物埴輪が出現する<sup>38</sup>。今後、今城塚古墳以前に築造された天皇陵級の古墳での、鷹匠埴輪の出土を期待したい。

## (3) 高句麗壁画古墳の鷹狩り図

次に朝鮮半島の鷹狩りについて、高句麗壁画古墳に描かれた鷹狩り図を基本に検証を行いたい。高句麗が二番目に都を置いた集安は、鴨緑江の右

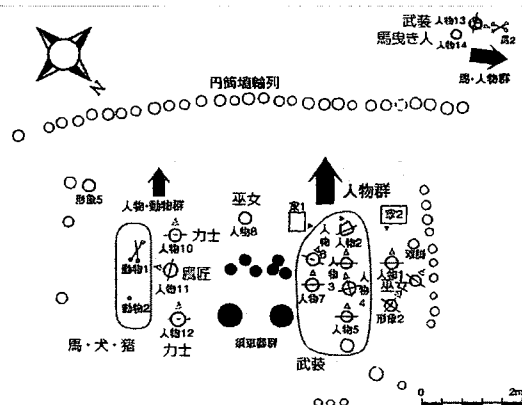


図9 井辺八幡山古墳東側造り出しの埴輪配列  
(註24c文献から)



図10 日光東照宮の鷹匠行列（註2b文献から）

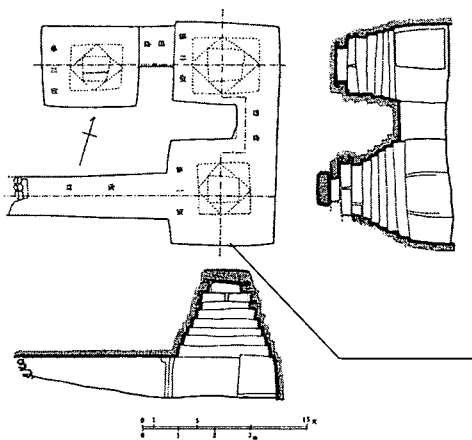


図11 三室塚古墳の石室と鷹狩り図（註39a文献から作成）

岸に広がる東西に細長い盆地で、北に禹山、東に竜山、西に通溝河が流れる。鴨緑江中流域には、1万2千余基の古墳が分布するが、その中の壁画古墳で鷹狩り図が描かれているものがある。国内城の北側に位置する三室塚古墳（中国吉林省集安市）である。

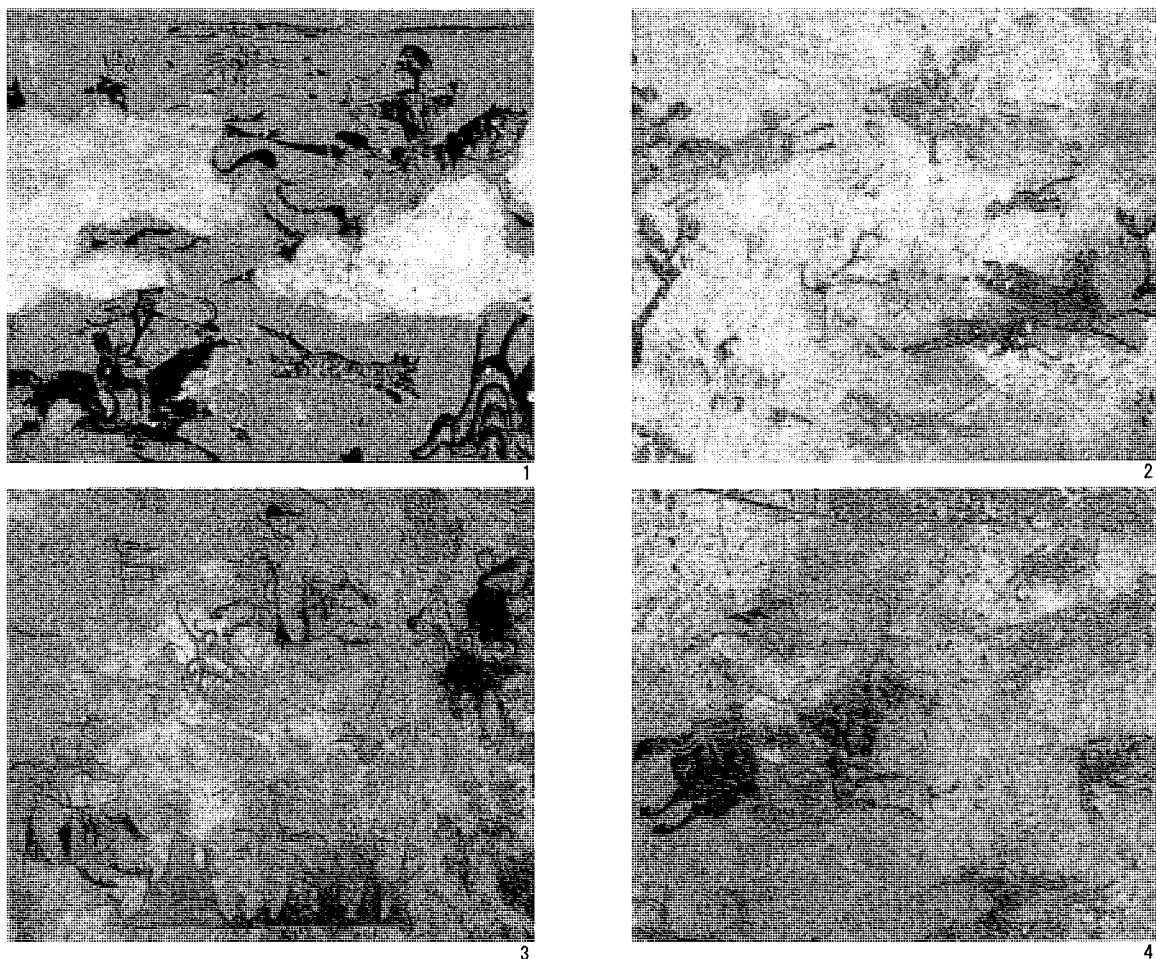
三室塚古墳は、直径約18m程度の円形墳と考えられる。石室構造は、名称のとおり石室が3室あり、羨道と通路で繋がっている。全体の平面形は、鉤形を呈する。第1室は、東西2.9m×南北2.7mの平面方形で、高さ3.3m、天井は6層の平行持ち送りで、さらに上段の2層が三角持ち送り構造となる。第2室と第3室の平面形は、東西に長い矩形である。第2室は、東西2.8m×南北2.1m、高さ3.1mで、天井は4層の平行持ち送りで、さらに上段の2層が三角持ち送り構造となる。第3室は、東西2.5m×南北2.0m、高さ3.1mで、天井は5層の平行持ち送りで、さらに上段の2層が三角持ち送り構造となる。第1室に比べて、第2室と第3室の規模が小さい。

第1室の南壁下段に鷹狩り図が描かれている。騎馬人物と鷹、追われる雉で、騎馬人物は着衣（着物）のみで、頭に帽子などの被り物はなく、左腕に鷹と思われる鳥を留める。鷹鈴の装着はわからない（図11）。

南壁上段には、奥（東）壁に向かって出行する

群像図が描かれ、北壁には、鎧馬に騎馬した甲冑武人の戦闘図、天井には流雲文・四神・菩提樹・鳳凰などが描かれる。また、第2室と第3室の4つの壁には、梁を支える力士が描かれる<sup>39</sup>。高句麗壁画古墳では、多室構造の石室を埋葬施設とするものに、生活風俗を主題とする壁画が多い。単室構造の石室の場合には、四神図や装飾文を主題とするのが一般的である。生活風俗図は、被葬者の日常生活の描写と考えられ、記念となった行事や豊かな生活の様子が墓室内に描かれる<sup>40</sup>。三室塚古墳の壁画構成には、高句麗壁画古墳の第1期（3世紀後半～5世紀初め）に比定できる要素が多々認められることから、築造時期は、5世紀初頭と考えられている。

高句麗壁画古墳では、第1期に比定される古墳で、生活風俗図及び狩猟図が描かれたものが多い<sup>41</sup>。狩猟図が見られる代表的な壁画古墳は、集安（中国吉林省集安市）の舞踊塚古墳（4世紀末～5世紀初頭）及び長川1号墳（5世紀中頃）、平壤周辺（北朝鮮黄海南道安岳郡・平安南道南浦市）の安岳1号墳（4世紀末）及び徳興里古墳（5世紀初頭）、薬水里古墳（5世紀初頭）などである。舞踊塚古墳及び長川1号墳では、鹿と虎を馬上から弓射する冠状の被り物を被った人物による狩猟図、徳興里古墳では、鹿と虎を馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図、薬水



1 舞踊塚古墳 2 長川1号墳 3 徳興里古墳 4 薬水里古墳

図12 高句麗壁画古墳の狩猟図（註40b～d文献から作成）

里古墳でも、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図、安岳1号墳では、鹿を馬上から弓射する狩猟図が描かれる（図12）。高句麗壁画古墳の狩猟図では、鹿や虎といった大型獣を馬上から弓射する描写が一般的といえる。三室塚古墳の鷹狩り図は、騎馬という共通点以外は、一般的な狩猟図の描写や構図とは相違する。

朝鮮半島の鷹狩りに関しては、『三国史記』巻第15・高句麗本紀第三太祖大王に、「六十九年冬十月、…、肅愼使来、献紫狐裘及白鷹白馬、王宴勞以遣之」とあり、高句麗の鷹狩りの系譜は、北方の肅愼あるいは漢から伝わったものと考えられ

ている<sup>42</sup>。

#### 4 考古資料分析による比較検討

次に考古資料による分析検討の結果を、比較検討したい。

鷹形埴輪の初現は、現状では5世紀末の前方後円墳である原山1号墳と考えられる。さらに6世紀前半の前方後円墳である大日山35号墳の出土状況と合わせると、鷹形埴輪は墳丘裾部に設置された埴輪祭祀場にて、人物埴輪などの他の形象埴輪と一体となって、儀礼空間を構成していたことが

理解できる。5世紀末～6世紀代にかけて、水鳥埴輪などに比べると極僅かではあるが、地域首長墓の儀礼空間を構成する要素のひとつとして、鷹形埴輪の存在を窺うことができる。さらに、7世紀代に入ってから、須恵器でその造形が表現され、葬礼での供献儀礼容器としての使用が窺える。地域首長墓を中心に5世紀末～7世紀にかけて、鷹形埴輪の造立及び須恵器の使用が窺えることから、鷹及び鷹狩りの存在が推定できる。地域首長墓での造立及び次に述べる鷹匠埴輪の造立と合わせて考えると、この時期に鷹甘の定着化がなされていったと考えられる。

また、鷹匠埴輪の腕に留まる鷹の尾羽の根元に相当する箇所に鷹鈴の装着が見られることから、飼育・訓練された鷹を表現したものと考えられる。



訓練された大鷹

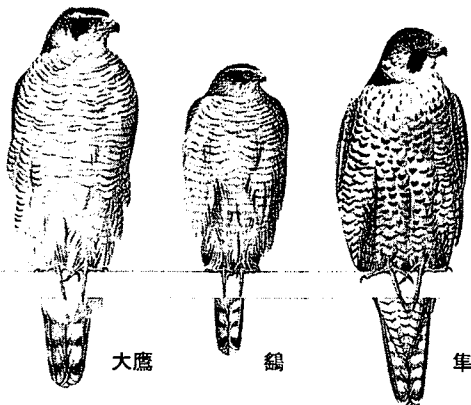


図13 鷹狩りに使用される主な鷹  
(写真筆者撮影・註3文献から)

鷹形埴輪及び須恵器鷹形平瓶でも、同様であることが理解できる。鷹鈴の装着の見られないものに関しては、飼育・訓練の施される以前の自然の状態のままを表現したものと考えたい。日本での鷹の存在は、縄文時代前期(約6千年前)まで確認されている<sup>43</sup>。鷹狩りで用いられる鷹の種類は、大鷹、鷂、隼が知られるが(図13)、百済で俱知と呼ばれた鷹がどの種類であったのかは解らないが、大鷹であった可能性が指摘されている<sup>44</sup>。

鷹匠埴輪は、頭髮を水豆良結びした男子全身像で、籠手を付けた左腕に鷹が留まる姿が基本となる。6世紀前半の今城塚古墳の鷹匠埴輪を除き、6世紀後半の群馬県地域で造立された鷹匠埴輪では、帽子や服飾に共通性が窺える。鷹匠埴輪は、現状では大型前方後円墳(大王墓)である今城塚古墳を初現とする。6世紀中頃までには、畿内とその周辺地域の前方後円墳(地域首長墓)でも造立され、6世紀後半には群馬県地域の円墳(後の郷長及び里長級の墓)で積極的に造立されている。鷹匠埴輪の造立状況によれば、鷹狩りが6世紀代において首長層を中心に急速に広がったことは確実であり、鷹甘の組織化を「首長の象徴」と述べた要因でもある。また、鷹形埴輪の造立と呼応する現象としても理解できる。

朝鮮半島で5世紀初頭に築造された高句麗の支配者層の墳墓である三室塚古墳の鷹狩り図では、騎馬に乗って雉を追いかける人物の左腕に鷹と思われる鳥が留まる。前述のとおり、騎馬人物は着衣(着物)のみで、帽子などの被り物は見られない。左腕に留まる鷹は、鷹匠埴輪との共通点である。帽子などの被り物が見られない点は、今城塚古墳の鷹匠埴輪との共通点ともいえる。鷹匠埴輪との大きな相違点は、騎馬である。

唐代の加彩騎馬軍匠俑<sup>45</sup>に見られるように、中央アジアの騎馬民族では、右腕に鷹(隼)を留めて左腕は馬の手綱をさばくことが基本とされ、鷹を留める腕の相違点に関しては、その原因が騎馬にあることが以前から指摘されている<sup>46</sup>。高句麗の鷹狩りは、騎馬が一般的であったと推定できるが、高句麗壁画古墳の鷹狩り図では、鷹が左腕



に留まっている点が注意され、日本の鷹狩りの狩猟姿勢との共通性が窺える。前述の加彩騎馬埴匠俑などからも、騎馬での鷹狩りは、中央アジアでの基本スタイルであったことが理解できるが、日本の古墳時代の鷹狩りでは、騎馬の想定はできない。考古資料の分析からは、鷹甘での騎馬の想定は、困難である。また、馬飼の特質として指摘できる軍事的性格<sup>47</sup>を、鷹甘に見いだすことはできない。榎村（1995）が提言した馬と鷹の一体となったような渡来の実態や、畿内王権の東国進出の象徴としての馬と鷹の一体となった姿<sup>48</sup>というものは想定できない。日本での騎馬と鷹狩りの受容にあたっては、その性格に差異が認められ、単純に同一視することはできない。

## 5 結論

現状の考古遺物の分析では、鷹甘の組織化は6世紀に拡充および定着化を成したことが理解でき、その初現は遡っても5世紀後半頃と考えられる。『日本書紀』の記載に関しては、仁徳天皇の在位期間を4世紀末までと考えるか、仁徳天皇陵として比定される大仙古墳（仁徳陵古墳・大阪府堺市）の築造年代である5世紀前半と考えるかによっても相違が窺える。

鷹甘によって飼育・訓練された鷹の特徴としては、尾羽に付けられた鷹鈴の存在が指摘できる。鈴は、形状は丸くて中空で、内部には玉や小石が入れられ、細かい切れ目が施されることで、反響して音が鳴り響く道具である。鷹鈴は、鷹狩りで、鷹の居場所を知るために欠かすことの出来ない道具で、現在でもその用途・機能は変わっていない。朝鮮半島及び日本では、5世紀代に三環鈴などの馬具として鈴の存在が認識できる<sup>49</sup>。日本での鈴付き考古遺物としては、鈴釧や鈴鏡などがよく知られている。5世紀後半の埼玉稲荷山古墳（埼玉県行田市）では、副葬品として三環鈴が知られ<sup>50</sup>、6世紀に入ると和田山古墳（石川県能美市）や諏訪山1号墳（埼玉県東松山市）などから鈴釧の出土が知られる<sup>51</sup>。塚廻り3号墳（群馬県太田市）

の巫女埴輪では、腰帯下に鈴鏡を下げるものが知られており<sup>52</sup>、西岡28号墳（東京都大田区）や鍛屋地2号墳（群馬県昭和村）などのように東国の多くの古墳では、鈴鏡が副葬されている<sup>53</sup>。

朝鮮半島の鷹狩りに目を向けると、『三国史記』巻第3・新羅本紀第三訥祗麻立干に「十八年春二月、百濟王送良馬二匹、秋九月、又送白鷹」、『三国史記』巻第25・百濟本紀第三毗有王に「八年春二月、遣使新羅、送良馬二匹、秋九月、又送白鷹」といった記載があることから、百濟では、飼育した鷹を貢ぎ物として新羅に送っており、百濟で鷹の飼育が盛んであったことが指摘されている。また、『三国史記』巻第25・百濟本紀第三阿莘王に「及壯志氣豪邁、好鷹馬」とあることから、百濟では馬に乗って鷹狩りが行われていたことも指摘されている。鷹鈴に関しては、『三国史記』巻第8・新羅本紀第八聖徳王に「二十二年夏四月、…、鏤鷹鈴」とあり、新羅より唐への貢物の中に「鏤鷹鈴」があったことがわかる。また、『三国史記』巻第11・新羅本紀第十一景文王では「九年秋七月、…、金花鷹鈴子二百顆、金花鷄子鈴子二百顆」のように、鷹狩りに使用する道具の名前が記されている。北方の渤海でも、鷹を飼育して貢ぎ物として唐に送っていたことが指摘されている<sup>54</sup>。現代韓国の鷹狩り（2010年に韓国を含めた11カ国の鷹狩りが、ユネスコの世界無形文化遺産に登録）でも、尾羽に鷹の飼い主の名前を書いた名札である「シチミ」と、鷹鈴が付けられる。鷹鈴は、獲物を捕獲した鷹の位置を知らせる役割を担っている。ベルギーやチェコ・フランスなどの西洋の鷹狩りでは、鷹の足に鈴を付けることが知られている。

鷹の尾羽に鷹鈴を装着する行為は、朝鮮半島と日本での鷹狩りの共通点として認識でき、古墳時代、鷹甘によって飼育・訓練された鷹に装着された尾羽の鷹鈴は、朝鮮半島で盛んであった鷹狩りが、日本へ渡来した根拠として指摘できる。鷹鈴の鑄造技術も、朝鮮半島を系譜とした技術であったと理解できる。



## 6 おわりに

本論では、考古資料の分析を中心に、朝鮮半島の高句麗や百済で盛んであった鷹狩りが、日本では鷹甘部として組織化され、首長の象徴として6世紀代に急速に拡充化が成されたことを指摘した。また、鷹鈴が、物質的資料に基づく渡来文化の根拠であることを指摘した。

古墳の埴輪祭祀場で演出された祭礼は、生前の被葬者の権力と財力の誇示ともいえ、高句麗壁画古墳の石室内に描かれた生活風俗図などと共通する要素といえる。鷹匠埴輪の出土状況に基づく配列の実態からは、鷹匠埴輪は、被葬者（支配者層）の姿ではなく、その支配下におかれた武人や力士と同等級の職能技術者で、鷹甘の正装した姿を表しているものと考えられる。また、日本では馬と一体となった騎馬のスタイルは、渡来当初から成立していないことをも指摘した。

現在では、鷹狩りは神事行事や流派としてその伝統が継承される<sup>55</sup>一方、鷹狩山（長野県大町市）や鷹狩駅（鳥取県鳥取市）といった地名や名前が各地に残っている。古墳時代に渡来した技術と文化は、その後の日本文化の発展に大きな役割を果たしている。今後も考古資料を中心に、渡来文化の追究を進めていきたい。

### 【註】

- 1) 宮内省式部職編『放鷹』吉川弘文館、1931.
- 2) a. 加藤秀幸「鷹狩りの歴史」『太陽』No72, 平凡社, 1969, pp.137~138.
- b. 加藤秀幸「鷹狩り文化史」『季刊アニマ』2, 平凡社, 1975, pp.89~96.
- c. 加藤秀幸「鷹・鷹匠, 鶴・鶴匠埴輪試論」『日本歴史』第336号(1976年5月号), 吉川弘文館, 1976, pp.60~74.
- 3) 大田区立郷土博物館編・発行『特別展 鷹狩り—歴史と美術—』, 1988.
- 4) a. 橋口尚武『東京の鷹匠—鷹狩りの歴史とともに—』〈けやきブックレット9〉, けやき出版, 1993.

- b. 橋口尚武「鷹狩—その技術と歴史—」『考古学による日本歴史』12, 雄山閣, 1998, pp.179~188.
- 5) 秋吉正博『日本古代養鷹の研究』思文閣出版, 2004.
- 6) 荻島大河「一宮内省の隼」『和光大学学生研究助成金論文集』19, 和光大学, 2011, pp.3~16.
- 7) 相川龍雄「埴輪を凝視めて(二)—鳥埴輪に対する考察—」『上毛及上毛人』第166号, 上毛郷土史研究會, 1931, pp.1~7.
- 8) 末永雅雄「鷹匠埴輪」『大和文華』第37號, 大和文華館, 1962, pp.49~54.
- 9) a. 水野正好「埴輪芸能論」『古代の日本2 風土と生活』角川書店, 1971, pp.255~278.
- b. 水野正好「埴輪の世界」『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』講談社, 1977, pp.172~187.
- 10) 塚田良道「鷹匠と馬飼」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1992, pp.301~312. (塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007, pp.153~159.に再録)
- 11) 榎村寛之『狩りと王権』斎宮歴史博物館, 1995.
- 12) 賀来孝代「鶴飼・鷹狩を表す埴輪」『古代』第117号, 早稲田大学考古学会, 2004, pp.83~105.
- 13) 若狭徹『はにわの世界—古代社会からのメッセージ—』東京美術, 2009.
- 14) 註10) 文献に同じ。
- 15) 亀井正道「人物・動物はにわ」『日本の美術』第346号, 至文堂, 1995.
- 16) 大塚美恵子「鷹の埴輪について—伝大室出土の鷹形埴輪に関連して—」『群馬考古学手帳』vol.6, 群馬土器観会, 1996, pp.89~106.
- 17) 『日本書紀』の読み下し及びその解釈は, 小島憲之ほか『新編日本古典文学全集3 日本書紀②』小学館, 1996.を参考にした。
- 18) 古典保存会編『播磨国風土記』古典保存会事務所, 1926.を参考にした。
- 19) 八木毅「播磨国風土記における品太天皇」『語文』第22輯, 文進堂(大阪大学国文学研究室編集), 1959, pp.12~16.
- 20) 辻秀人ほか『原山1号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982.
- 21) 註11) 文献に同じ。
- 22) 註16) 文献に同じ。
- 23) 鶴を表現した鳥形埴輪にみられる。  
註12) では, 首紐は鶴飼の鶴の表現として指摘さ

- れる。
- 24) a. 丹野拓『平成20年度特別展岩橋千塚』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2008.
- b. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『公開討論会 大日山35号墳の埴輪を考える』, 2010.
- c. 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011.
- d. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『特別展記念シンポジウム資料集 大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』, 2011.
- 25) 川道亨ほか『五目牛新田遺跡・五目牛南組Ⅱ遺跡・五目牛清水田Ⅱ遺跡・柳田Ⅱ遺跡』伊勢崎市教育委員会, 2005.
- 26) a. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳—平成13年度・第5次規模確認調査—』, 2002.
- b. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳—平成14年度・第6次規模確認調査—』, 2004.
- c. 鐘ヶ江一朗ほか『発掘された埴輪群と今城塚古墳』高槻市教育委員会・高槻市立しろあと歴史館, 2004.
- d. 高槻市教育委員会編・発行『今城塚古代歴史館常設展示図録(改訂版)』, 2012.
- 27) a. 木暮仁一「オクマン山古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3 古墳』群馬県, 1981, pp.941-948.
- b. 佐藤春樹ほか『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』太田市教育委員会, 1999.
- 28) 註) 8文献に同じ。
- 29) 永峯光一・水野正好編『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』講談社, 1977, p.94.
- 30) 森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972.
- 31) 泉武ほか『星塚・小路遺跡の調査』天理市教育委員会, 1990.
- 32) 大阪府立近つ飛鳥博物館編・発行『古代の群像—俑と埴輪—』, 1996.
- 33) 註) 7文献に同じ。
- 34) 註) 12文献に同じ。
- 35) Yoshiko Kakudo, “The Art of Japan” Asian Art Museum, San Francisco, 1991, p.45.
- 36) 註2) c. 文献に同じ。
- 37) 註2) b. 文献に同じ。
- 38) a. 国立歴史民俗博物館編『はにわ—形と心—図録』朝日新聞社, 2003.
- b. 註) 13文献に同じ。
- 39) a. 池内宏・梅原末治『通溝』巻下, 日満文化協會, 1973.
- b. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
- 40) a. 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
- b. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986.
- c. 読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988.
- d. 共同通信社編・発行『高句麗壁画古墳』, 2005.
- 41) 全虎兌「古墳壁画と高句麗文化」『高句麗の文化と思想』明石書店, 2013, pp.307~324.
- 42) 註1) 文献に同じ。
- 43) 若狭三方縄文博物館(福井県三方町)展示。  
参考資料として,  
a. 西田正規「動物遺体」『鳥浜貝塚』福井県教育委員会, 1979, pp.164~166.
- b. 若狭町歴史文化課編・発行『若狭三方縄文博物館・若狭町歴史文化館常設展示図録』, 2014.
- 44) 註6) 文献に同じ。
- 45) 註3) 文献に同じ。
- 46) 註2) b. 文献, 註4) b. 文献に同じ。
- 47) 基峰修「馬飼について—日本列島における古墳時代渡来文化の検証—」『人間社会環境研究』第28号, 金沢大学大学院人間社会環境研究科, 2014, pp.127~145.
- 48) 註11) 文献に同じ。
- 49) 早乙女雅博「朝鮮半島出土の環鈴」『MUSEUM東京国立博物館美術誌』No.402, 東京国立博物館, 1984, pp.24~34.
- 50) 大塚初重「埼玉県稲荷山古墳の重要性」『武蔵埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会, 2007, pp.233~328.
- 51) a. 京都国立博物館(京都府京都市)展示。  
b. 金井塚良一ほか『諏訪山古墳群』考古学資料刊行会, 1970.
- 52) 石坂久則ほか『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980.
- 53) a. 註13) 文献に同じ。

- b. 小村正之ほか『川額軍原 I 遺跡』昭和村教育委員会, 1996.

<sup>54)</sup> 註 1) 文献に同じ。

- <sup>55)</sup> a. 平凡社編・発行「小特集日本の伝統鷹狩り」『太陽』No72, 1969, pp.127~140.
- b. 平凡社編・発行「鷺と鷹」『季刊アニマ』2, 1975.
- c. 大塚紀子「放鷹, 諏訪流, 羽合一考」『戦国のまなびや一朝倉文化・文武を極めるー』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館, 2013, p.51.